

十二世紀末における阿波国の武士団の存在形態

—いわゆる「田口成良」の実像を中心に—

野 口 実

はじめに

近年、院政期―鎌倉幕府成立期における地方武士の存在形態に関する研究においては、その在京活動、すなわち中央権力との関係が具体的に解明されつつある。かつて、武士勢力の発展過程については、社会の下部構造を重要視する発想から、平将門の乱以来の辺境に蓄えられた反古代的なエネルギーが源頼朝の幕府樹立に結実するような理解が一般であった。したがって、研究対象とされる武士は、一〇世紀以降、着々と在地に根を下ろしていく存在として認識されてきた。そして、源頼朝もこうした在地武士たちの歴史的な要求を体現した棟梁として評価されてきたのである¹⁾。

しかるに、個別武士団に関する実証的な研究成果に基づいてあらためて頼朝の挙兵を支えた勢力や成立期における鎌倉幕府の運営主体を分析してみると、将門の乱当時から地つきの勢力に系譜を発するという側面ばかりが強

調されてきた武士団よりも、むしろ十二世紀以降に国衛の目代や荘園の沙汰人、さらには流人・浪人などとして東国に下った京武者層に出自や由縁をもつ武士たちこそが、その主な担い手として評価されるべきことが明らかになってきた。⁽²⁾

地方武士を中央の政治とは無縁な存在として対立的に捉えてきた従来の認識に行きすぎのあったことは明らかであり、彼らの存在形態は広く政治史的な視角から再評価を加える必要がみとめられるのである。また、これまで、変革の主体の発生する場として古代国家の辺境に位置づけられる東国が重要視されてきたが、この時代の武士のアイデンティティが在京活動に求められるとするならば、畿内近国と辺境の間に位置する地域に成立した武士たちの果たした役割についても検討を進めなければなるまい。

そのような中間地帯としては、北陸・中部・東海・中国地方があげられるが、とりわけこの時代の全体史の通史叙述の中で空白の多かったのは四国地方であろう。その中で、私がとくに興味を惹かれるのは、中世後期、すなわち室町・戦国時代に京都・畿内近国を席卷した細川・三好氏の本拠地であり、木材や荏胡麻の生産で京都・畿内の経済とも密接な関係を有した阿波である。この時代に、当地には如何なる武士勢力が成立し、内乱期にどのような役割を果たしたのか、これまで蓄積されてきた地域史の研究成果を踏まえつつ、⁽⁴⁾ 検討を加えていきたい。

注

- (1) かつては私自身もそのように理解していたが、現在は認識をあらためている。拙著『武門源氏の血脈 為義から義経まで』(中公論新社、二〇一二年)、拙稿「源頼朝のイメージと王権」(『歴史評論』六四九号、二〇〇四年)・「東国武士」の実像(高橋修編『実像の中世武士団 北関東のものふたち』高志書院、二〇一〇年)・地方の「豪族的武士」の活躍と人脈(元木泰雄編『週

刊 新発見！日本の歴史 一八号 平氏政権の可能性』朝日新聞出版、二〇一三年）・「治承く文治の内乱と鎌倉幕府の成立」（拙編『中世の人物 京・鎌倉の時代 第二巻』清文堂、二〇一四年予定）などを参照されたい。

- (2) 拙稿「流人の周辺―源頼朝拳兵再考―」（拙著『中世東国武士団の研究』高科書店、一九九四年、初出一九八九年）・「京武者」の東国進出とその本拠地について―大井・品川氏と北条氏を中心に―（京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第一九号、二〇〇六年）・「摂津源氏と下河辺氏」（科研報告書〔研究代表者永井晋〕『金沢北条氏領下河辺庄の総合的研究』二〇一〇年）・「源平内乱期における「甲斐源氏」の再評価」（佐伯真一編『中世文学と隣接諸学 4 中世の軍記物語と歴史叙述』竹林舎、二〇一一年）・「下野宇都宮氏の成立と、その平家政権下における存在形態」（京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第二六号、二〇一三年）。

(3) 高橋典幸「武士にとつての天皇」（『岩波講座 天皇と王権を考える10 王を巡る視線』岩波書店、二〇〇二年）。

(4) とくに福家清司・山下知之両氏の研究（後掲）は重要であり、これまで当該期の武士論の研究に反映されることの少なかったことは残念である。

一 大栗山（一宮）社司 河人氏

源平内乱期直前の段階における阿波国の武士団の在地での活動を知る上で、もっとも良質な史料は、『愚昧記』の裏文書としてのこされた久安二年（一一四六）七月十一日「河人成俊等問注申詞記」（『平安遺文』二五八三号）である。阿波国の国衙近傍に所在した延命院（法勝寺末）所司が、同国一宮社司河人成高の弟成俊らによる濫行を提訴したことによって、この日、京都の檢非違使庁で行われた口頭尋問の記録である。¹⁾これによって、事件の概要をまとめる

と以下のとおりである。

同年二月十四日以前、同国大粟山に住む安宗が一宮社司河人成高の舎弟である成俊と対立。成俊は安宗を拘束したが逃げられたので、かわりに延命院の三味僧快順の妻になっていた安宗の姉妹を捕らえた。快順は妻の解放を求めたが、彼も捕らえられて証文を差し出す。その後、安宗も牛・板などの借用証文(解文)を成俊に提出したが、快順は将来をおそれて妻を離別し、安宗を追放する。しかし、成俊は安宗の不在を理由に快順を捕らえる。これに対して延命院の下司をつとめる守房は快順の解放を成俊に要求するが、かえって捕らえられて暴行を受け、さらに従者一人と「上牛廿(廿)頭・斤定稻三千束・太刀百腰・腹卷廿領・水干并袴廿具、奈岐刀万柄」などの財物を奪い取られてしまう。そして二月十四日にいたり、成俊らは軍兵八〇余人を率いて延命院に乱入し、供僧等を追捕した。

この史料の内容についての分析は福家清司氏・山下知之氏らの研究に詳しい⁽²⁾。従来は、地域史的な関心によるもののほかは主に法制史・社会史の視角からしか捉えられることがなかった史料であるが、とくに山下氏による在地領主としての河人氏に対する分析などからは、近年の武士論研究の成果を前提に再検討を加えることで当該期の武士のもつ新たな側面が解明できるのではないかと思われる。

ところで、この史料に登場する河人成俊は「無勢之者」と言いながら八〇余人の兵を動員しており、その舎弟で一宮社司の成高は「所従眷属数多之者」であり、その中には「追捕使」を称する者が四名含まれていた。一宮は国衙のイデオロギー装置であり⁽⁴⁾、諸国の一般的な状況をふまえるに、河人成高は阿波国衙の有力在庁として武士団を

編成した存在と見ることが出来よう。⁽⁵⁾ なお、延命院は、現在、徳島市国府町延命にある常楽寺が、その後身と考えられている。⁽⁶⁾

これより約四〇年後の治承・寿永内乱期に、平家の家人として活躍する阿波国の武士に阿波民部大夫成良（俗称「田口成良」）がある。成良の弟桜庭介良遠（成遠）の本拠が国衛近傍であることや、中世を通じて一宮社の神官が「成」を名の通字にしていた事実からすると、彼はこの河人氏の系譜を引く存在とみられる。⁽⁷⁾

福家清司氏の指摘するように、河人成高が社司をつとめた一宮社は創設段階の大栗山の一宮社（上一宮大栗神社）ではなく、国衛近傍に分祠・勧請された一宮社とみるべきで、彼の弟である成俊と対立した大栗山の安宗は上一宮大栗社の社司と考えられる。⁽⁸⁾

注

(1) この時、検非違使別当は藤原公教であった（『公卿補任』久安二年項）。

(2) 山下知之「阿波国における武士団の成立と展開—平安末期を中心に—」（『立命館文学』第五二二号、一九九一年）、福家清司「院政期における阿波国一宮社とその成立事情について」（『阿波・歴史と民衆Ⅱ』徳島地方史研究会、一九九〇年）、鮎喰川流域の武士団（『神山町史』上巻、二〇〇五年）。

(3) 小中村清矩「上代の文章」（『皇典講究所講演』九三、一八九二年、のち『陽春廬雜考』巻七、吉川半七、一八九八年に収録）、滝川政次郎「事発日記」（『法制史研究』六号、一九五六年、のち「事発日記と問注状」に改題加筆の上、『法制史論叢』第四冊 律令諸制及び令外官の研究）角川書店、一九六七年（名著普及会復刻版、一九八六年）に収録）、羽下徳彦「中世本所法における検断の一考察」（石母田正・佐藤進一編『中世の法と国家』東京大学出版会、一九六〇年）、大饗亮「律令制下の司法と警察」（大学

教育社、一九七九年)、盛本昌広「逐電と縁切り」(『年報中世史研究』第一三三号、一九八八年)、石井進「二世紀の日本―古代から中世へ―」(『岩波講座 日本通史七』中世一、岩波書店、一九九三年)、戸田芳実「初期中世武士の職能と諸役」(同『初期中世社会史の研究』東京大学出版会、一九九一年、初出一九八六年)、告井幸男『撰関期貴族社会の研究』(塙書房、二〇〇五年)。
なお、上記文献については坂口太郎・小川弘和氏の御教示を得た。

(4) 石井進「中世成立期軍制研究の一視点―国衙を中心とする軍事力組織について―」(『史学雑誌』第七八編第二二二号、一九六九年)。
(5) 「河人」という地名は阿波国内に所見がない。太田亮『姓氏家系大辞典』(角川書店、一九六三年)には、この名字について、備中・丹波・但馬に「川人部」、山城・備中に「川人」が所見するとある。

(6) 『日本歴史地名大系 第三七巻 徳島県の地名』(平凡社、二〇〇〇年)。

(7) 島田麻寿吉『徳島市郷土史論』(泉山会出版部、一九三三年)、田中省三「宮氏の系図」(『阿波一宮城』編集委員会編『阿波一宮城』徳島市立図書館、一九九三年)、福家清司「鮎喰川流域の武士団」。

(8) 福家清司氏は、『阿波女社宮主祖系』によって同社の神主家が「宗」を名の通字としていることを指摘している(『鮎喰川流域の武士団』)。

二 「阿波民部大夫成良」は田口氏か

『国史大辞典』の「田口成良」の項(安田元久氏執筆)には、「平安時代末期の動乱の中で活躍した阿波国の有力在地武士。重能・成能とも記す」と述べた上で、養和元年(一一八二)に伊予国に攻め入って源氏方の河野一族を破ったり、寿永二年(一一八三)の平氏西走後、四国に平氏の根拠地を確保するなど、『平家物語』や『吾妻鏡』に見える彼の事

蹟が記されている。

ところが、『平家物語』には「阿波民部重能は、この三が年のあひだ、平家によくよく忠をつくし、度々の合戦に命をおしまずふせきた、かひけるが」(巻第十二)、『吾妻鏡』には「民部大夫成良平家の使として、伊予国に乱入す。而るに河野四郎以下在序ら異心あるによって合戦に及び、河野頗る雌伏す」(養和元年九月二十七日条)というように、両書の何処にも彼が「田口」を称したとは書かれていないのである。『六代勝事記』にも「民部大輔(夫)成良ときこえしかしこきものをしてつきたりし経のしま、また『歴代皇記』寿永二年五月二十三日条にも「阿波民部大夫忠(成)能被下此国其勢二千余騎云々」とあるばかりである。

さらに、同時代史料である記録(公卿の日記)を見ても、『山槐記』治承四年(一一八〇)十二月二十七日条に「先陣阿波国住人民部大夫成良の軍兵、木津に向かい一陣を為し、衆徒と合戦す」、『玉葉』養和元年二月二十九日条に「尾張の賊徒少々美乃国に越し来たり、阿波民部重良の徒党を射散らす」とあって、「田口」を称した形跡はない。

実に「田口氏」の初見は、『鎌倉大日記』の建久八年(一一九七)条に見える「阿波民部大夫成能子田口範能」⁽¹⁾なのである。しかも、同書(彰考館本系統の流布本)の原本とされる生田美喜藏本には「阿波民部成能子範能」⁽²⁾とあって、後出本に「大夫」と「田口」が書き足されたことが明らかであり、成良が田口氏とされるようになるのは近世にまで降る可能性が高い。

成良が「田口氏」であることを説明する上で巷間に流布している根拠は、平安時代初期の大同三年(八〇八)に阿波守になった田口息継の子孫が祖神を祀ったのが現在の上一宮大粟神社であり、その田口氏が奉仕したことで「田口大明神」とも呼ばれるようになったという伝承である。⁽³⁾しかし、田口息継の子孫が阿波に土着したことの裏づけは得られず、まして成良が上一宮の社司であったことも確認できない。⁽⁴⁾

むしろ、『平家物語』の流布によって世上に「阿波民部成良」の名が知られるようになったことから、上一宮大栗神社と成良の関わりを主張する説が唱えられるようになったのではないだろうか。もし成良が田口息継の子孫として田口を名乗ったのならば、それは氏姓としての「田口朝臣」であり、別に名字（一般に本拠地ないし本領の地名）を称するのが普通である。⁽⁵⁾ 田口を名字として称したというのならば、その田口は領域的な（所領を表す）地名でなければならぬ。彼が田口大明神の社司として田口を名乗ったという可能性を完全に否定することはできないが、成良が「田口」を称したことを示す史料は皆無であり、阿波国内には成良が名乗るに相応しい領域地名としての「田口」は検出できないのである。

『平家物語』ばかりか『吾妻鏡』にも田口氏と記されていない。「阿波民部（大夫）成良」が、なぜ「田口」成良として流布するに至ったのか、きわめて不可思議なことである。福家清司氏は、成良の子の教能（則良・範良・成直）が「田内左衛門尉」と称されたことに着目し、「田内」が「田口」と誤記されたことによって生じた可能性を指摘しているが、卓見と言うべきであろう。しかし、その誤りがいつの時点で発生し、どのように流布していったのかは不明とせざるをえない。⁽⁷⁾

注

- (1) 『延慶本平家物語』第六本の十二には「阿波民部成良が嫡子、田内左衛門成直」と見える。
- (2) 『神奈川県史編集資料集 第四集 鎌倉大日記』（神奈川県企画調査部県史編集室、一九七二年）。
- (3) 島田麻寿吉『徳島市郷土史論』、一宮松次「二宮城史話（二）」（『阿波一宮城』編集委員会編『阿波一宮城』徳島市立図書館、一九九三年、初出一九五七年）、福家清司「院政期における阿波国一宮社とその成立事情について」、同「鮎喰川流域の武士団」、

長谷川賢二「平家と阿波—阿波民部の周辺を考える—」（『軍記と語り物』第四六号、二〇一〇年）。ちなみに、福家氏は神山町勸善寺所蔵「大般若経」（南北朝期書写）奥書の中に上一宮大栗神社のことを「田口大明神」と称したものと述べて（「鮎喰川流域の武士団」、また、長谷川賢二氏は十四世紀に上一宮の神宮寺が「大栗田口神宮寺」ともいわれたことが勸善寺所蔵「大般若経」巻六十七の奥書から知られることや近世の上一宮の棟札に「田ノ口大明神」とあることを指摘している。なお、勸善寺所蔵「大般若経」奥書の調査成果は、一九九八年に神山町教育委員会生涯学習課から刊行・頒布されている。

(4) 近世徳島藩によって編纂された地誌『阿波志』において、成良の一族は一貫して紀氏と表記されているが、これは田口氏の本姓を紀氏とする『新撰姓氏録』の説に基づくのであろう。

(5) 先に述べたとおり、成良の同族とみられる河人氏も名字の地を持つはずだが、それは不明である。成良の一族はその存立基盤を阿波国衙に依拠していたから（後述）、「河人」は吉野川水系に関わる国衙の分課などの職掌に由来する呼称なのかも知れない。

(6) 福家清司「鮎喰川流域の武士団」。

(7) 成良を田口氏とする俗説が流布した原因については、坂口太郎氏より以下のような御教示を頂いている。

① 江戸幕府の譜代大名・旗本である牧野家は「田口氏」を称し、『寛永諸家系図伝』はその祖先を「阿波民部大夫重能」としている。同書は、『新撰姓氏録』を引いて、武内宿禰の後胤蝙蝠臣が推古天皇の時代に大和高市郡田口村に居住し「田口臣」と号したと記載する。こうしてみると、牧野家が「田口氏」を称したことが、その先祖とする成良をも「田口成良」と呼ぶ遠因をなした可能性が高い。ちなみに、幕府の儒家林家で編纂された『続本朝通鑑』巻六十九の養和元年九月庚子（二十七日）条に「民部大夫田成良」、同巻第七十五の文治元年二月辛未（十七日）条に「田成直」「桜庭介田良遠」と記されているのは、『寛永諸家系図伝』を踏まえたものかもしれない。

② 『大日本史』第五十三「安徳天皇紀」や第百五十三「平宗盛伝」などに「田口成良」とあるのは、水府の史官たちが、成良

の子の範能に「田口」の名字を付している彰考館所蔵『鎌倉大日記』の記載を念頭に置いて記した可能性が考えられる。そして、『天日本史』が「田口成良」の名称を採用したことが、近世・近代の歴史家に規定的な影響を与えたのではないか。

きわめて説得力のある見解で、今日の歴史理解における近世の史家の影響力の大きさを考えざるを得ないが、牧野家が田口氏を称したにしても、何を根拠にして成良を先祖と考えたのかが疑問としてのこるのである。

三 成良の一族とその在京活動

成良の子教能（範能・則良）は『平家物語』（巻第十・十二）に「田内左衛門尉」として登場する。「左衛門尉」は左衛門府の三等官。田内は平氏の内舍人なら「平内」、源氏なら「源内」、藤原氏なら「藤内」と呼ばれるように、「田」のつく氏の出身で内舍人に任官したことを意味する。角田文衛氏はこの「田」を、通説に従って「田口」の田と理解したのだが、これを否定する形で「粟田」氏とする説を提起したのが五味文彦氏である。

五味氏は『山槐記』治承二年（一一七八）十月十九日条に、左右兵衛尉への補任を期して高倉天皇の中宮平徳子の御産用途料七千疋を抛出した「内舍人粟田則良」と見える粟田則良を田内教能その人と見る。そして、成良が民部大夫を称したことの傍証として、『兵範記』承安元年（一一七二）十二月八日条に民部丞として「粟田忠□」が見え、『三長記』元久三年（一一〇六）二月二十二日条所見の「民部丞粟田章時」が同四月三日条では「五位」となっていることから、粟田氏が五位の民部丞、すなわち「民部大夫」に至る家系であることを示し、また建仁四年（一一〇四）二月十七日「官宣旨」（『鎌倉遺文』一四三三三号）元久元年九月日「阿波富田莊立券文案」（同 一四八一号）・建保二年（一二二四）四月二十日「阿波国留守所下文案」（同 二二〇一号）によって、阿波国住人ないしは在庁官人（国使税所）として「前

右近衛将監」の肩書きをもつなどの複数の粟田氏が存在することも指摘し、成良の一族が粟田氏であったことを明らかにしたのである。⁽²⁾

その後、成良の一族とみられる粟田氏の記録における所見は野中寛文氏・福家清司氏によって、さらに付け加えられている。すなわち、『吉記』治承四年十一月十八日条の「左兵衛尉粟田信良中宮御産功」の信良は則良の誤りで、彼が所期の目的を達して左兵衛尉に任官したことが知られること、また、『外記補任』によって治承四年六月十六日に外記に補任され、翌年正月五日に五位に叙されたことの知られる「粟田良連」は『源平盛衰記』巻四十二に成良の伯父として見える「桜間外記大夫良連」に同定されるというのである。⁽³⁾

『除目大成抄』(第八)には、滝口を勤める正六位上粟田朝臣章貞(章廣)が上日(出勤日数)第一の労によって左右兵衛尉あるいは右馬允への任官を望む申状と、彼の上夜(宿直)が一八四三回であることの勘申が収録されている。⁽⁴⁾彼もまた成良の一族であることは名の「章」の字から容易に推察されることである。

成良の一族は阿波国で在庁の地位を占めるとともに京都に出仕して滝口・内舍人・兵衛尉・近衛将監などの武職・武官を歴任するのみならず、外記・民部丞といった文官としても活動して五位に至る家格を形成していたことが一次史料によって確認できたことは重要である。

当時、文武に優れた中央の下級貴族が国の目代あるいは荘園の沙汰人などとして諸国に下り、在地豪族に入嗣するなどの方法で留任・土着する例が多く見られるが、⁽⁵⁾成良の場合も、その数代前の人物(粟田氏)が阿波に下向した可能性が高く、先述した河人氏もその系統に属するものとしてよいと思われる。

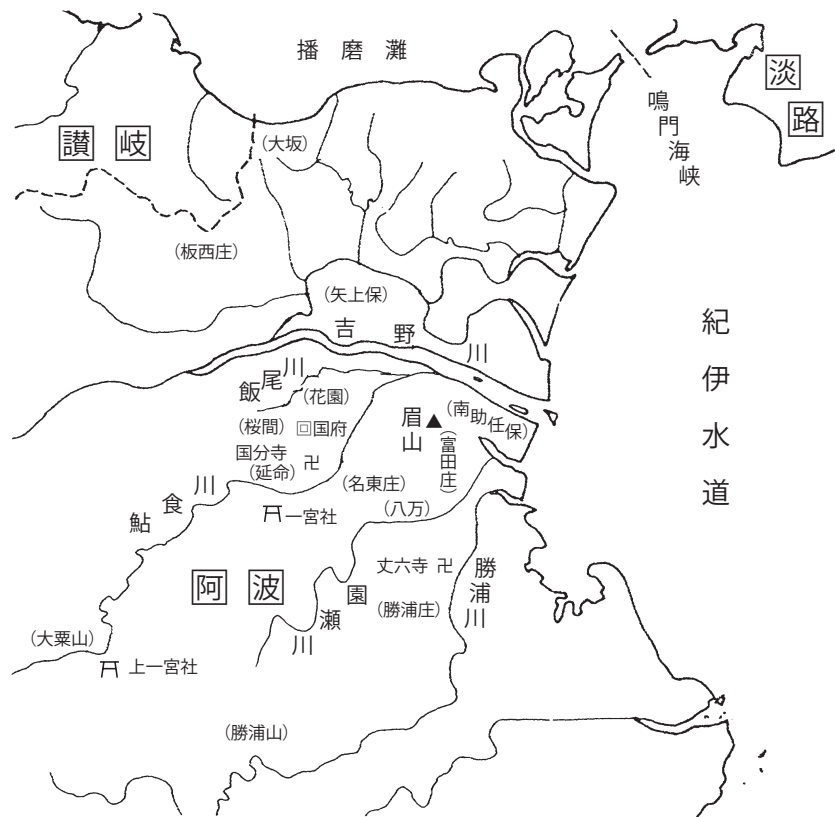
- (1) 角田文衛『平家後抄 落日後の平家』(朝日新聞社、一九七八年)。
- (2) 五味文彦『阿波民部大夫と六条殿尼御前』(『日本歴史』第四〇六号、一九八二年)。ちなみに、『三長記』所見の「栗田章時」の「章」は、当時の通例では「ノリ」と訓んだ。
- (3) 野中寛文「阿波民部大夫成良」(『古代文化』第五四卷第六号、二〇〇二年)、福家清司「鮎喰川流域の武士団」。
- (4) 角田文衛・五来重編『新訂増補 史籍集覧 別巻一 除目大成抄(大間成文抄)』(臨川書店、一九七三年) 五三〇～五三一頁。
- (5) 備前難波氏・伊豆北条氏・武蔵大井氏など。拙稿「平家と瀬戸内の武士」(『芸備地方史研究』第二八二・二八三号、二〇一二年)・「京武者」の東国進出とその本拠地について―大井・品川氏と北条氏を中心に―・「撰津源氏と下河辺氏」・「下野宇都宮氏の成立と、その平家政権下における存在形態」を参照されたい。

四 成良一族の在地支配

成良一族の阿波国における勢力圏については、久安二年(一一四六)の「河人成俊等問注申詞記」における所見や成良の弟良遠が「桜庭(間)介」を称したことから、国衙権力を背景として、その周辺に形成されていたことがわかる。

「桜間介」の桜間は『和名抄』の名西郡桜間郷で、現在の徳島県名西郡石井町桜間および徳島市国府町桜間に比定される。ここは国府想定地から北北西方向約二キロ半。吉野川の支流である飯尾川の南に展開する沖積地で、肥沃で古くから開けた条里制地割の遺存するところである。¹⁾ここにのこる名勝「桜間の池」は吉野川の河跡湖で、今

十二世紀末における阿波国の武士団の存在形態—いわゆる「田口成良」の実像を中心に—



12世紀末の阿讃地方

こそ三三平方は足らずの小池になってしまっているが、往時は広大な面積を占めていたという。⁽²⁾『平家物語』(巻第十二)に「阿波民部重能(成良)がおと、桜間の介能(良)遠とて候。・・能遠が城にをしよせて見れば、三方は沼、一方は堀なり」とあることから、当時の桜間は水に囲まれた地形であったことが想定され、既述のように、良遠が介を称したのははじめ、成良の一族(粟田氏)は国衛の在庁官人としての立場を占めていたから、この地は河川水系を通じた阿波国府の外港のごとき機能を担っていたのかも知れない。⁽³⁾

桜間の東隣に位置する花園(現在の徳島市国府町花園)は、寿永二年(一一八三)の都落ちで一旦は鎮西まで下った平家一門が勢いを取り戻して福原に進出した頃、叛旗を翻した伊予の河野氏を攻めるため、平通盛が阿波に下った際、当地にあった城に入ったことが伝えられているところである(『平家物語』巻第九、『源平盛衰記』巻三十六)。時代は降るが、建武二年(一一三五)九月二十日「阿波守頼氏請文案」(『疋田家本離宮八幡宮文書』)に「阿波国花園住人七郎左衛門」なる者が見える。彼は吉野川に新関を設けて、荏胡麻に通行税をかけるなど、大山崎の油座商人の荏胡麻売買を妨害したのだという。これらのことから、当時の花園が吉野川水運の本流に面する水運の重要拠点であったという推測が示されているが、⁽⁴⁾ 妥当な見方といえるであろう。

元久元年(一一〇四)九月、吉野川河口近くに春日社領富田庄が成立する(『阿波富田荘立券文案』鎌倉遺文一四八一号)。この莊園の前身は名東郡南助任村(保)と以西郡津田島であるが、これらは「当国住人前右兵衛尉藤原親家・前右近衛将監粟田重政」の相伝私領であった。⁽⁵⁾ 先の考察のとおり、この粟田重政は成良の一族とみられるから、彼らは阿波国の心臓部というべき国府周辺・吉野川水系下流の平野部をおさえて強大な勢力を誇っていたものと思われるのである。⁽⁶⁾ なお、徳島市教育委員会が昭和五七年(一九八二)度から九ヶ年計画で実施した阿波国府跡の調査における出土品は、大部分が平安時代後期以降のものであり、成良の一族が活躍した前後の時代に符合する。⁽⁷⁾ 後述するよ

うに、成良は平清盛の主導する日宋貿易に積極的に関与し、平家の有力家人として大輪田泊の築港や屋島内裏の造営で大きな役割を果たすが、その前提として、ここに見られるような国衙権力を背景にした吉野川水運の掌握が想定されるのである。

注

- (1) 山下知之「阿波国における武士団の成立と展開—平安末期を中心に—」。
- (2) 徳島史学会『徳島県の歴史散歩』（山川出版社、一九九五年）。国土交通省四国地方整備局徳島河川国道事務所「第5回吉野川講座」テキスト (<http://www.skr.mlit.go.jp/tokushima/river/event/yoshikouza/no05/yoshitext05.htm>)。
- (3) 藤本頼人「河川交通とその担い手—中世前期の吉野川を起点として—」（小野正敏ほか編『水の中世 治水・環境・支配』高志書院、二〇一三年）。
- (4) 石躍胤央・高橋啓監修『ふるさと徳島』（徳島市文化振興課、一九八八年）。
- (5) 建仁四年（一一〇四）二月十七日「官宣旨」（鎌倉遺文「一四三三号」。福家清司「阿波国富田荘の成立と開発」（徳島地方史研究会創立十周年記念論集『阿波・歴史と民衆』南海ブックス、一九八一年）参照。
- (6) 徳島市上八万町の園瀬川に沿い、眉山の南麓に位置する河西遺跡からは、十二世紀末～十三世紀初頭の石積み護岸遺跡と同時期の木製品や瓦などが出土しているが、ここは阿波南部と国府方面を結ぶ交通路上に位置しており、川津であった可能性が高いという（長谷川賢二「平家と阿波—阿波民部の周辺を考える—」。長谷川氏も指摘されるように、平家の麾下に属することによって勢力を拡大した成良の一族は、この辺りも支配下におさめていたのではないだろうか。ちなみに、栗田氏の一族と目される河人成高の「河人」が国衙の一分課の職掌であることを先に推測したが、あるいは、備中や丹波に見られる職業部の一つである「川人

部」に由来するものであるのかも知れない（太田亮『姓氏家系大辞典』参照）。いずれにしても、粟田氏の一族と吉野川の関係の深さを示す傍証となろう。

(7) 石躍胤央・高橋啓監修『ふるさと徳島』。

五 平家家人としての成良

ほんらい平家の家人組織の中核を占めたのは、その本貫地である伊勢・伊賀に本拠を有する伊藤氏や伊勢平氏の一族、それに平正盛・忠盛が備前守を歴任し、瀬戸内海賊の追討に携わる中で強固な主従関係を結んだ備前・備中の武士たちであった。⁽¹⁾

保元の乱で平清盛に従った郎等には、伊勢・伊賀の武士のほか、備前の難波三郎経房・同四郎光兼、そして備中の瀬尾太郎兼康があつた（『保元物語』上）。

平治の乱後、平家は貴族社会における地位を上昇させ、その一門は諸国の受領のみならず知行国主を歴任する。安芸国は清盛・経盛・頼盛が国守を歴任し、さらに平家の知行下に置かれたが、その過程で同国一宮巖島社の神主佐伯景弘が有力な家人となつたことはよく知られている。また、鎮西でも清盛・頼盛が大宰大式に任じたことにより、大宰府府官の原田種直や宇佐公通が平家と強固な関係で結ばれるようになった。⁽²⁾

東国でも、もともと源義朝に従属していた相模の大庭景親が「東国ノ御後見」（源平盛衰記）巻二十）として清盛に奉仕することになり、また下総には清盛にとつて義理の兄弟にあたる藤原親政が千田庄を本拠に在地武士団の編成を進めるなど、平家と私的な関係を結ぶ勢力があらわれるようになる。⁽³⁾

さらに、仁安二年（一二六八）、重盛が清盛の後継者として国家守護権を院から認められると、豊後の緒方氏、下野の（藤原姓）足利氏などのように、「小松殿」（重盛）の家人があらわれるようになり、また武蔵の熊谷直実のように、自ら同国の知行国主である知盛の家人に列するようなケースも見られるようになった。⁽¹⁾

こうして、平家は全国的な武家の棟梁としての地位を固めていくのであるが、それは公的な権力を背景にしたもので、やはり強固な主従関係で結ばれた家人は、西国に偏在していたと言わざるを得ない。

名目上国政から引退した清盛は、仁安四年春の頃から福原に住んで日宋貿易を推し進め、さらには福原への遷都を構想するに至るが、この過程で平家との関係を強め、都落ち後の平家一門を支えるほどにまで勢力を伸張したのが、阿波の栗田重能（成良）である。彼が京都に出仕して従五位下民部丞に叙任されたことは上述のとおりであるが、『源平盛衰記』などによると、平家都落ちの後、讃岐国屋島に平家を迎え、阿波一国の棟梁的な立場を確立して四国全体にも影響力を及ぼすに至ったという。『平家物語』・『吾妻鏡』などで「阿波民部大夫重能」と呼ばれる所以である。

成良が平家に接近した理由については二つの事情を想定することが出来る。一つは阿波国内で競合する関係にあった近藤（藤原）氏の台頭である。近藤氏は阿波郡柿原庄（現在の阿波市吉野町垣原）を本拠とする在庁官人で、一族の師光が鳥羽・後白河院の近臣として活躍した信西の乳母子となったことから中央に出仕して院近臣の有力貴族である藤原家成の養子となり、平治の乱後には出家して西光と称し、自ら院の近臣として反平家の急先鋒となったことは周知の通りである。⁽²⁾「法皇第一近臣」〔玉葉〕安元三年六月一日条〕となった西光の子息師高も院北面に祇候し、検非違使大夫尉を経て加賀守に任ずるに至り、その弟たちも衛府尉に任じ北面に列するに至っている。師光の官途の振出しは後白河天皇の滝口であったから、この一族が武士として活動したことは明らかであろう。⁽³⁾

師光が中央で急速に地位を向上させたのに対応して、阿波にあった彼の一族近藤氏もまた勢力を強めたであろう

ことは容易に想像される。⁽⁸⁾ 成良はこれに対抗するために、平家に接近を図ったのであろう。そしてその具体的な契機は、山下知之氏の指摘するように、承安元年（一二七二）春の除目で平親国（清盛の室時子の甥）が阿波守に補任されたことにあつたと思われる。⁽⁹⁾ さらに、治承三年（一二七九）十一月のクーデターの際、平宗盛の養子宗親が阿波守に補任されたことは、阿波国が実質的に平家の直轄下におかれたことを示すものといえ、この時点で、粟田成良はまさしく「阿波民部」と呼ばれるに相応しい立場を確立したのであろう。

もう一つの理由は、清盛の海洋進出政策と成良の利害の一致である。承安三年（一二七三）、清盛は福原の外港である大輪田泊に「経嶋」の築造を開始するが、その工事を担当したのが成良である。高橋昌明氏は、成良やその一族が大輪田泊に來航した宋船の帰り荷となる土佐・阿波の木材の漕運を担うことによつて富と勢力を拡大した可能性と、阿波から淡路島以西の瀬戸内海に抜けるには鳴門の渦潮を避けて明石海峡を通る必要があつたことから、大輪田泊の改修が成良の一族にとつて好都合であつたことを指摘している。⁽¹¹⁾

治承元年（一二七七）の鹿ヶ谷事件の結果、清盛によつて西光が殺害されたことにより、成良の一族は阿波国においても圧倒的な勢力を築き上げることとなり、福原にある清盛にとつて最も頼りになる水軍勢力としての地位も得ることになつたと思われる。治承四年以後、反平家勢力が各地で蜂起した際、成良が追討軍に属して各地を転戦し、重要な役割をつとめているのはその反映といえよう。⁽¹²⁾

平家の存在は一族の在地における優位と発展を支えるものであつたから、成良は都落ち後の平家を積極的に支援した。すでに平家政権の下で四国地方を管轄する軍政官のような立場にあつたと想定される成良は、養和元年（一二八二）九月、反平家の動きを示した河野四郎以下在庁勢力を討つために伊予で軍事行動を展開しており（『吾妻鏡』同月二十七日条、近藤氏など阿波国内の反平家勢力のみならず周辺諸国の勢力とも対立する状況に置かれていた。

したがって、彼は何としても平家の復権をはかる必要に迫られていたのである。平家が太宰府を追われると、成良はこれを讃岐国屋島に迎え、「阿波国住人を始めとして、四国の者共靡かして、たのもしき様に振る舞」ったので、それを喜んだ平家は、安徳天皇のもとで除目を行って成良を阿波守に補任し、成良は安徳天皇のために「四国の内をもよほし」て『平家物語』巻八「太宰府落」、内裏として「板屋の御所」を造営したという（『延慶本平家物語』第四の十四）。

注

- (1) 拙稿「平家と瀬戸内の武士」。
- (2) 西村隆「平氏「家人」表—平氏家人研究の基礎作業—」（『日本史論叢』第一〇輯、一九八三年）、飯田久雄「平氏と九州」（『竹内理三編』『莊園制と武家社会』吉川弘文館、一九六九年）。
- (3) 拙著『源氏と坂東武士』（吉川弘文館、二〇〇七年）。
- (4) 元木泰雄「平重盛論」（臈谷壽・山中章編『平安京とその時代』思文閣出版、二〇〇九年）、拙稿「平氏政権下における坂東武士団」（拙著『坂東武士団の成立と発展』弘生書林、一九八二年。二〇一三年、戎光祥出版より復刊）。
- (5) 元木泰雄「王朝守護の武力」（齒田香融編『日本仏教の史的展開』塙書房、一九九九年）。
- (6) 山下知之「阿波国における武士団の成立と展開—平安末期を中心に—」。
- (7) 米谷豊之祐「瀧口武者考」（『院政期軍事・警察史拾遺』近代文藝社、一九九三年）。
- (8) 藤本頼人氏は、近藤氏の本拠である柿原庄も吉野川流域に位置して国衙に近く、国内の政治・経済・交通・宗教の面で求心力の高い一帯であったことを指摘している（同氏「河川交通とその担い手—中世前期の吉野川を起点として—」）。

(9) 山下知之「阿波国における武士団の成立と展開―平安末期を中心に―」。

(10) 『玉葉』・『山槐記』 治承三年十一月十九日条、『尊卑分脈』。

(11) 高橋昌明『平清盛 福原の夢』(講談社、二〇〇七年)。

(12) 治承四年(一一八〇)十二月、平重衡軍の先陣として木津に向かって南都の衆徒と合戦。養和元年(一一八一)二月、美濃国で反平家勢力と合戦。寿永二年(一一八三)五月、二千余騎を率いて加賀に下る等。なお、第二章所引の史料を参照されたい。

(13) 『延慶本平家物語』(第六本の十五)の壇ノ浦合戦に臨む水軍の陣容を述べた部分には「阿波民部成良を先として、四国の者共百余艘にて二陣に漕ぎ続く」と見え、成良が四国における平家勢力の総帥の任にあつたことが知られる。なお、野中寛文「阿波民部大夫成良―治承期―」も参照されたい。

六 源義経軍の阿波進攻

屋島合戦は一ノ谷・壇ノ浦合戦と並んで源義経の華々しい活躍で広く巷間にも知られた合戦である。しかし、すでに『平家物語』の研究者が指摘しているように、この合戦は同時代にさほど意識されるような大規模な戦闘が展開されたものではなく、それゆえに那須与一・鍛引・弓流しなどのエピソードが加えられたもの¹⁾のようである。屋島における合戦の実態は、義経が少数の手勢で奇襲をかけ、平家の本拠を焼き払い、それに対して平家は殆ど為す術も無く退却を余儀なくされたものであつた。それは義経が摂津渡辺から直接屋島に攻め寄せたのではなく、まず阿波に上陸して平家を支える粟田成良の一族の討滅を果たしていたからであろう。平家の根拠地である屋島を陥落させることは戦略的に極めて有効なものであつたが、それは義経の阿波制圧によってこそ達せられたのである。

『吾妻鏡』によると、義経は元暦二年（一一八五）二月十八日、五艘の船に分乗した一五〇騎を率いて丑刻（午前二時）に摂津渡辺を出発し、卯刻（午前六時）に阿波国椿浦（勝浦）に上陸を遂げ、当国住人近藤親家を「仕承」として屋島への進撃を開始。その途上で栗田成良の弟である桜庭介良遠を攻め、良遠は城を捨てて逐電したという⁽²⁾。早くに地元の研究者島田麻寿吉氏が指摘したように「義経の阿波上陸はこの成良の根拠攻撃にあったことに相違無い⁽³⁾」であらう。

義経を迎えた近藤親家は鹿ヶ谷事件で平家に殺された西光（俗名師光）の子と伝えられ、在京活動の形跡も認められるが、平家政権期には栗田氏の勢力伸長によって雌伏を余儀なくされていたと思われる。元木泰雄氏の指摘するように、親家は西光との関係から院権力と提携しており、義経にも阿波・讃岐などの情報を伝え、屋島攻撃も両者の連絡のもとに行われたことが想定できるのである⁽⁴⁾。

注

(1) 北川忠彦「屋嶋合戦の語りべ」（『軍記物論考』三弥井書店、一九八九年、初出一九七八年、佐伯真「『屋嶋合戦と『屋嶋語り』』についての覚書」（青山学院大学総合研究所人文学研究センター『研究叢書』第二二号、一九九八年）。

(2) 『平家物語』諸本における近藤親家の所見については、長谷川隆「『平家物語』屋島の合戦における近藤六親家」（『高松工業高等専門学校研究紀要』二八一九九三年）を参照されたい。

(3) 島田麻寿吉「徳島市郷土史論」一五四頁。

(4) 島田麻寿吉「徳島市郷土史論」および山下知之「阿波国における武士団の成立と展開—平安末期を中心に—」参照。親家は、建仁四年（一一〇四）二月十七日「官宣旨」（『鎌倉遺文』一四三三三号）に「前右兵衛少尉」として所見しており、この官歴は在

京活動の成果とみるべきであろう。なお、近藤氏の阿波における存在形態に国衙や河川水系との関わりで粟田氏一族と共通するものがあつたことは藤本頼人「河川交通とその担い手―中世前期の吉野川を起点として―」に詳しい。

(5) 元木泰雄『源義経』(吉川弘文館、二〇〇七年)。

七 讃岐国の在地勢力と粟田氏

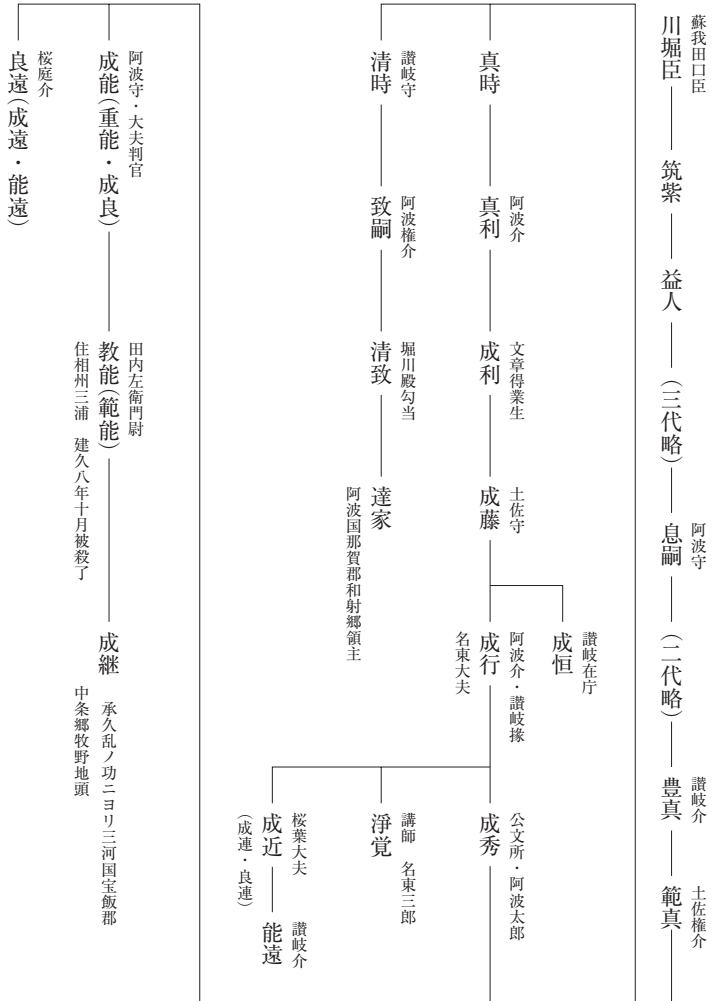
粟田成良が屋島に内裏を造営したのは前述の通りだが、屋島は讃岐国に属する。とするならば讃岐国内の在地武士たちと成良の関係は如何なものだったのだろうか。

『吾妻鏡』元暦元年九月十九日条によれば、一ノ谷合戦の後、讃岐国の武士が京都に逃げ上っており、源頼朝は彼らを御家人として橘公業の下知に従うように命じたという。その際に作成された交名にはいわゆる讃岐藤原氏をはじめとする在庁官人・郡司系の武士たちが名を連ねていた。⁽¹⁾「公」を名の通字とする橘公業の一族は長く讃岐目代をつとめており、頼朝は彼をもつて国内の武士を率いさせ、四国攻撃の先陣を委ねたのである。⁽²⁾

ところで、交名に見える武士たちの国内における勢力圏は、讃岐藤原氏(古代豪族綾氏の地盤をうけ、院近臣藤原家成と由縁をもつ)は香河・阿野郡など、またそれ以外の武士も三野郡・那珂郡など、讃岐国の中部から西部に偏していることがうかがえる。⁽³⁾ここで想起されるのが、阿波粟田氏の勢力が讃岐国内にも及んでいたことを示す徴証が存在することである。

史料としては二次的なものとせざるを得ないが、当該期の阿波粟田氏の一族の広がり伝える材料として、宝賀寿男編著『古代氏族系譜集成』上巻(古代氏族研究会、一九八六年)に収録された「田口朝臣」の系図を抄出したい。

十二世紀末における阿波国の武士団の存在形態—いわゆる「田口成良」の実像を中心に—



この系図は粟田成良を阿波守田口息継の子孫という認識に基づいて作られたものだが、成良の世代の周辺に関する記事は、諸史料と整合するところが多く、活用するに足るものと思われる。

注目されるのは、この一族に讃岐国に関する職名を持つ者が多いことである。成良の祖父とされる成行は「讃岐掾」、その兄弟の成恒は「讃岐在庁」、成良の従兄弟にあたる能遠は「讃岐介」とある。これらは、成良の一族が阿波のみならず讃岐にも勢力を及ぼしていたことを物語るのではなからうか。

『延慶本平家物語』（第五本の十六）によると、阿波・讃岐の在庁たちは、都落ちした平家が勢力を回復して福原に入った元暦元年（一一八四）正月の頃、兵船をもって備前下津井にあった平教盛らを攻撃した。しかし、反撃を受けて敗北を喫したので京都への逃走を図り、その途中淡路島の福良に拠ったが、ここでも敗れて讃岐国の在庁以下百三十人が首を斬られたという。

讃岐国の在庁として名を連ねる有力武士のうち親平家勢力は粟田成良のもとに組織され、これに反対する勢力は同国を知行する後白河院を頼って上洛を企てたのであろう。前述のように、讃岐国の目代は長く橋氏がつとめており、その一族で右馬允に任じていた橋公長は子息の公業らをともなって治承四年（一一八〇）十二月、鎌倉の源頼朝のもとに向していた。一ノ谷合戦の後、橋公業が西国攻めの方の先陣として、反平家方武士の統率を頼朝から委ねられたのは、このような経緯によるものであろう。^④ 橋公長は『後白河院北面歴名』に名を連ねており、^⑤ 公業の起用には院の意志の介在があったものとみてよい。ちなみに、一ノ谷の合戦後、平宗盛は講和の条件として院に讃岐国を賜ることを求めている（『玉葉』元暦元年二月二十九日条）。

注

(1) 『香川県史2 通史編』(香川県、一九八九年)、野中寛文「讃岐武士団の成立—『綾氏系図』をめぐって—」(『四国中世史研究』創刊号、一九九〇年)。

(2) 野中寛文「讃岐武士団の成立—『綾氏系図』をめぐって—」岩田慎平「小鹿島橘氏の治承・寿永内乱—鎌倉幕府成立史に寄せて—」(『紫苑』第八号、二〇一〇年)。

(3) 野中寛文「讃岐武士団の発生と源平合戦」(新香川風土記刊行会『新香川風土記』創土社、一九八二年)、同「讃岐藤原氏」(坂口良昭ほか監修『香川県風土記』旺文社、一九八九年)、同「讃岐武士団の成立—『綾氏系図』をめぐって—」田中稔氏も、この交名に名を載せる武士たちの本拠が讃岐国西部の国府周辺に分布することを指摘している(『讃岐国の地頭御家人について』(同『鎌倉幕府御家人制度の研究』吉川弘文館、一九九一年、初出一九六七年)。

(4) 『香川県史2 通史編』、野中寛文「讃岐武士団の成立—『綾氏系図』をめぐって—」、岩田慎平「小鹿島橘氏の治承・寿永内乱—鎌倉幕府成立史に寄せて—」。ちなみに、これに先立って頼朝の義弟の一条(藤原)能保が小除目で讃岐守に補任されているが(『吾妻鏡』元暦元年六月二十日条・「公卿補任」文治四年項)、岩田慎平氏は、これを国術と関係の深い在地勢力を誘引する方策と捉えている(同『鎌倉幕府と武士社会の研究』二〇一二年度 関西学院大学博士論文)。このとき能保は鎌倉に滞在しており、しかも讃岐守補任は頼朝の申任によるものであった。したがって、橘公業はその目代に補された可能性が高い。

むすびにかえて—治承・寿永内乱前夜における地方武士団の実態—

源平内乱期に平家の有力家人として活躍した阿波の武士として、従来「田口成良」として辞典類にも立項されて

いた人物が、正確には「粟田成良」と称されるべきであること、彼の一族が積極的に在京活動を行っており、そこで得た官職は当該期に留守所目代などとして地方に進出した中央の下級官人と同種のものであったこと、したがって、この一族の出自も純粹な在地豪族ではなく、十二世紀に入った頃に下向した中央官人の血統を引く存在とみるべきであることなどが明らかに became と思ふ。^① 東大寺復興の立役者である重源が内乱終結の後、東大寺に粟田成良の供養塔を立てたり、成良が願主となって阿波国に造立された丈六仏九体を東大寺の浄土堂に移したことから、重源と成良の密接な関係が指摘されているが、重源が滝口などを勤める京武者の家の出身であることを考えると、二人の関係は在京活動の中で生じたものであろう。^④

治承・寿永内乱に際し、個々の在地武士団の去就が地域紛争あるいは同族間抗争に帰結することは、すでに東国武士団の研究の中で明らかにしたところであるが、それは阿波においても同様であった。そして、阿波が畿内近国に接続するエリアに属することも手伝って、粟田氏と近藤氏に示されるように、在地武士の在京活動は活発であり、その結果、国内における対立は、中央の政治変動をダイレクトに反映する形をとることとなった。

近藤氏を出自とする師光は、院近臣の信西に仕え、藤原家成の養子となって立身をはかった。一方、粟田氏は在京活動の中で武官のみならず民部・外記など実務官人としての要職に就いており、当時、地方支配に活躍した目代に相応する能力を有する一族であった。^⑥ 粟田氏・近藤氏共に阿波国衛の有力在庁としての地位を確立しており、こ

こでも、中央貴族対地方武士という単純な図式で内乱期を理解することの誤りを見いだすことが出来るのである。有力在庁層が交通・流通の拠点の掌握を存立基盤にしていたことは、阿波国でも明確であるが、紀伊水道対岸の和泉国大鳥郷（のちの堺）や熊野水軍との関係などは、内乱史の研究を深めるためにも今後の検討課題としなければならないであろう。^⑦

文治元年（一一八五）二月の屋島合戦における源義経の勝利は、阿波の平家方勢力の掃蕩を前提とした緻密な作戦によって達成されたものであることが、粟田一族に敵対する阿波近藤氏や讃岐藤原氏、それに橘公業らの動向から浮かび上がってきた。従来、治承・寿永内乱期における四国については屋島合戦や伊予の河野氏・土佐の源希義のほかに照明が当てられることが少なかったが、⁵⁾ 今後は解明された史実を踏まえて全体史の中に正統な位置づけが求められよう。

注

（一）たとえば伊豆の北条時家（時政の祖父）などのように、中央から目代・沙汰人などとして下向した人物が在地豪族の娘と婚を通じるような形が一般的に見られたようである。拙稿「『京武者』の東国進出とその本拠地について—大井・品川氏と北条氏を中心—」参照。ちなみに、『曾我物語』（巻第五）によると、伊豆の在庁狩野介茂光の孫娘である曾我兄弟の母も目代との間に一男一女をもっている。

（二）五味文彦「阿波民部大夫と六条殿尼御前」、同「東大寺浄土堂の背景」（同『院政期社会の研究』山川出版社、一九八四年）、大石雅章「博物館での新鮮な感動」（徳島県立博物館会報『アワ・ミュージアム』第二三号、二〇〇三年）、石躍胤史ほか『徳島県の歴史』（山川出版社、二〇〇七年）七六～七九頁。

（三）『群書類従』所収『紀氏系図』などによると、重源は滝口・左馬允を歴任した紀季重の子で、俗名は重貞という。一族の多くは「季」を名の通字としており、滝口や武者所をへて馬允・兵衛尉・衛門尉に至る官途を歩む京武者であった。『山槐記』久寿二年（一一五五）八月二十八日条に後白河天皇の滝口として所見する紀重遠もこの一族の出身であろう。

（四）重源は保延三年（一一三七）、十七歳のときに「四国辺」で修行しており（『南无阿弥陀仏作善集』）、このときに粟田氏の一族と

関係をもったことも想定しうる。

(5) 拙著『坂東武士団の成立と発展』・『中世東国武士団の研究』。

(6) 目代およびその職能的な出身階層、あるいは在庁との関係については、飯沼賢司「在庁官人制成立の一視角―子姪郎等有官散位を中心として―」（『日本社会史研究』二〇号、一九七九年）、関幸彦『国衙機構の研究』（吉川弘文館、一九八四年）、泉谷康夫「平安時代における国衙機構の変化―目代を中心として―」（同『日本中世社会成立史の研究』高科書店、一九九二年、初出一九七七年）、大津透「平安時代の地方官職」（山中裕・鈴木一雄編『平安貴族の環境』至文堂、一九九四年）、吉永壮志「平安時代後期における目代の具体像」（『待兼山論叢』第四五号、史学篇、二〇一一年）を参照されたい。

(7) 壇ノ浦合戦に熊野水軍が義経軍に加わっていることや室町・戦国期に阿波国を本拠とする細川氏や三好氏が和泉国の堺を拠点として京都への支配を行ったことが想起されよう。ちなみに、元暦一（文治元）年二月十六日、すなわち義経が摂津渡辺から阿波に船を発した日の前日に、大鳥郷司兵衛尉忠信の代官による濫行停止を命ずる和泉国司の庁宣が発給されている（『平安遺文』四三二一号）。兵衛尉忠信とは源義経の腹心佐藤忠信のことである。義経が四国征討の前提に忠信を大鳥郷司に任じ、これに応じた忠信の行動が、この庁宣の発給に結びついているのかも知れない。

(8) 阿波や讃岐の在地勢力の動向を踏まえて、屋島合戦の評価について従来の認識に異議を唱えた最新の研究としては、菱沼一憲「源義経の合戦と戦略―その伝説と実像」（角川書店、二〇〇五年）がある。伊予の河野氏については、山内譲「伊予国における武士団の成立と展開」（『日本歴史』第三七九号、一九七九年）、源希義については、市村高男「中世前期土佐国の地域構造と権力配置―源希義とその周辺の考察から―」（『土佐史談』第二四二号、二〇〇九年）、上杉和彦「中世土佐地域史論の諸前提―鎌倉幕府権力と土佐国の関係に関する一試論―」（『十世紀研究会編』『中世成立期の政治文化』東京堂出版、一九九九年）がある。

〔付記〕 本稿執筆にあたっては、関係文献の渉猟に際しては坂口太郎氏（近畿大学非常勤講師）、また二〇一三年一月二六～二七日に実施した現地調査に際しては大栗美菜氏（徳島市立考古資料館学芸員）から御教示や資料の提供を頂いた。ここに記してあつく謝意を表する次第である。

なお、本稿は京都女子大学宗教・文化研究所 平成二十四年度 共同研究「目代・沙汰人の活動にみる都鄙交流（法然・親鸞登場の歴史的背景に関する研究 IV）」〔研究代表者〕野口実〔研究協力者〕岩田慎平・畠山誠・前川佳代・藪本勝治〕の成果の一部である。このほか、当該共同研究の成果としては、岩田慎平「武士論からみる中世前期後期の分岐—吉田賢司氏「武家編成の転換と南北朝内乱」に接して—」（京都女子大学宗教・文化研究所ゼミナール『紫苑』第一号、二〇一三年）がある。

〔追記〕 本稿提出後、森公章氏の論文「古代阿波国と国郡機構—観音寺遺跡出土木簡を手がかりに—」（『海南史学』第五〇号、二〇一二年。のちに若干の補訂を加えて、同著『在庁官人と武士の生成』吉川弘文館、二〇一三年、に収録）に、「河人成俊間注申詞記」の分析をはじめ、十二世紀における阿波国の在地勢力に触れる部分のあったことに気づいた。栗田氏と古代以来の伝統的豪族である粟凡直氏との連続性が示唆されていることなど、古代史側の立場から注目すべき見解が多い。見落しとの不明をお詫び申し上げると共に御参照を願うところである。（初校に際して）

〈キーワード〉

阿波国 平家 武士団